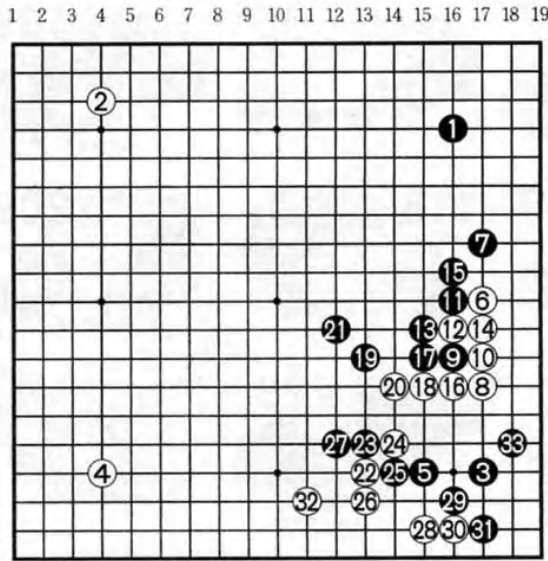


# 上毛特選碁

玉村町囲碁会定例会

白五段格 荻原 義正(玉村)  
黒四段格 加藤 正二(玉村)  
(定先コミなし)

▽第1譜 1~33



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

## 主役はあなた

「玉村囲碁会は、弱い人でも、伸び伸び打てる気楽な会」。今年3月まで会長を務めた、島田準さんが作り上げた会の雰囲気。会員同士が、自分で打ち上げたの霧で会長を務めた、島田準さんが作り上げたの霧で、開始早々に打たれた白6、8の二間開きに対する黒9、11の押さえ込みを、近ごろよく見かけして、和気あいあいと楽しんでる。



第1着を打つ加藤さん(左)と荻原さん



参考図

今回、新しく会長に選ばれた加藤正二さんが、地域では古くから知られてきた。出せば、参考図のように、黒2から8までとなる。次の白22に対する黒23の外ヅケから27までの分断策は強手で、早くも両者の闘志が火花を散らしてきた。

(観戦記 加悦正昭)

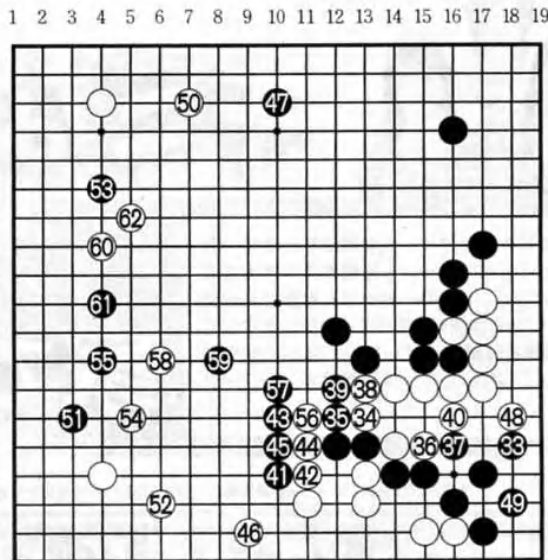
ている強豪の荻原義正さんと対局した好取組を、加藤さんの会長就任披露を兼ねて紹介したい。会は、月1回の大会と毎週土曜日の例会を開き、参加者は常時30人前後。今回の対局は、静かに落ち着いて対局を、との役員たちの

# 上毛特選碁

玉村町囲碁会定例会

白五段格 荻原 義正(玉村)  
黒四段格 加藤 正二(玉村)  
(定先コミなし)

▽第2譜 34~62、33再掲



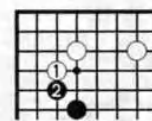
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

## 侍魂

白の荻原義正さんは1941年生まれ。玉村町創設した県囲碁界の大神。入社が、ここでは参考図2の後すぐに白1と、まず隅を守っておき、黒2なら白3と攻める策もあった。



荻原義正さん



参考図1

【訂正】24日付第1譜で「今年3月まで会長を務めた、島田準さん」とあるのは「事務長を務めた、島田準さん」との誤りでした。

(観戦記 加悦正昭)

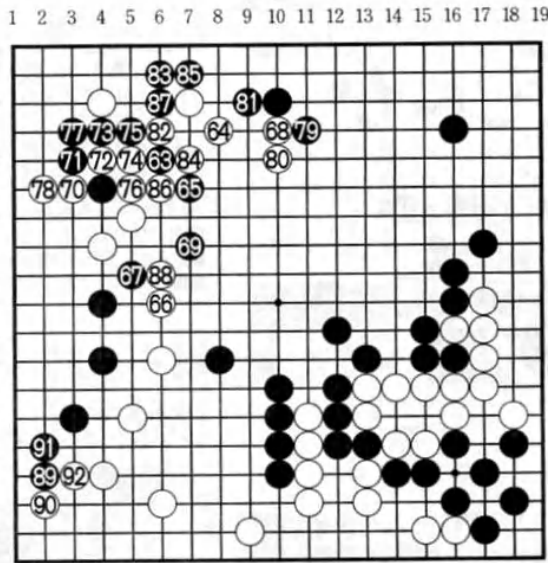
さて盤上、昨譜の黒の最終手33に対する備えとして、白は34から40まで、窮屈な姿で眼づくりをしたが、ここでは参考図1の白1から3と切つて、強く戦つていきかけた。白56の出てくる黒57の

# 上毛特選碁

玉村町囲碁会定例会

白 五段格 萩原 義正(玉村)  
 黒 四段格 加藤 正二(玉村)  
 (定先コミなし)

▽第3譜 63~92

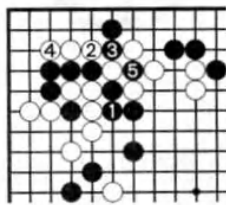


## 今こそ囲碁の出番

黒の加藤正二さんは1946年生まれ。長く日立製作所に勤務されたのち、現在は関連会社のルネサス高崎で情報システムの仕事をされている。囲碁は中学生のころ、



加藤正二さん



参考図

郷里の愛知県で父親に教わって覚えた。日立に入社後、日本棋院ルネサス高崎支部の支部長として支部を育て、発展させてきた。現在、日本棋院群馬県支部連合会の副会長の要職もこなされている。結局、黒は85から87と上辺をワタって、実利を大きく稼いだ。一方の白も中央が一気に厚くなった。白はその厚みを背景に、明譜で勝負を懸けた戦いを任付けていく。  
 (観戦記 加悦正昭)

白84のアテに対する黒85では、参考図のように黒1と要の1子をツギたいところだが、そう打つと、黒5までとコウになる。黒はこれを避け、黒5までとコウを打つたのだらう。このコウは「天下きかす」の大コウなので、やってみる価値はあった。

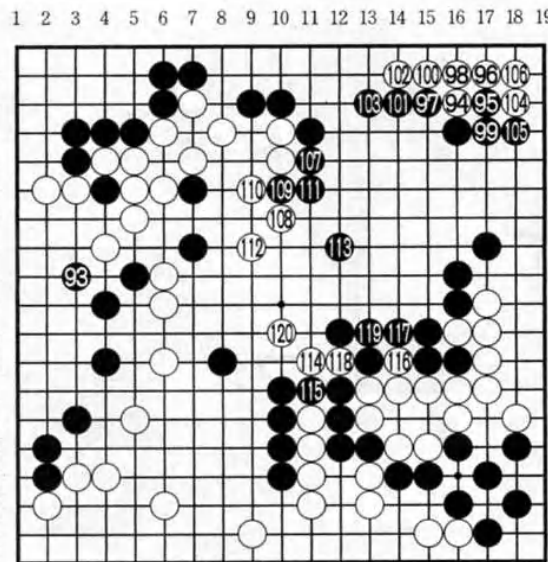
さて盤上は、いよいよ中盤戦。白70の下ツケに対する黒71のオサエに、白が72と切り違えたところから、白兵戦が始まった。白84のアテに対する黒85では、参考図のように黒1と要の1子をツギたいところだが、そう

# 上毛特選碁

玉村町囲碁会定例会

白 五段格 萩原 義正(玉村)  
 黒 四段格 加藤 正二(玉村)  
 (定先コミなし)

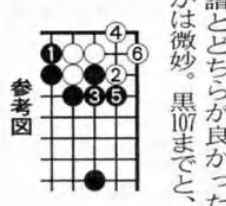
▽第4譜 93~120



## 人生と同じ

碁には「答え」が用意されていない。だから、必死に考えるほかない。この点で、人生や社会と同じだと思う。

この答えのないものを考え続ける習慣が、人間を強くするのだと思う。それを受け入れるキヤパシティがある。それが、碁のパワーだと思う。



参考図

この答えのないものを考え続ける習慣が、人間を強くするのだと思う。それを受け入れるキヤパシティがある。それが、碁のパワーだと思う。

碁には「答え」が用意されていない。だから、必死に考えるほかない。この点で、人生や社会と同じだと思う。この答えのないものを考え続ける習慣が、人間を強くするのだと思う。それを受け入れるキヤパシティがある。それが、碁のパワーだと思う。

ここにかなりの黒地を囲ったが、上辺の黒はソアキになっている。次に白は108と黒109のハネコミを誘い、白112とカケツいで、黒113と囲わせた。続いて白が放った114から、118の切りは、白がかねてから狙っていた。周囲は勝負手。周りが激突した。さて盤上は、そのパワの白が強いところだけに、下辺で孤立した黒のシノギは難しそう。まず白94の打ち込みに始まる、106までの右上隅での応酬。黒は99で、参考図の1から5までと打ち、白をより小さく閉じたいところ。かくとだに打たれてみればしびれます。さしも知らじな手筋の威力を(五裡夢中・囲碁川柳より)

かくとだに打たれてみればしびれます。さしも知らじな手筋の威力を(五裡夢中・囲碁川柳より)

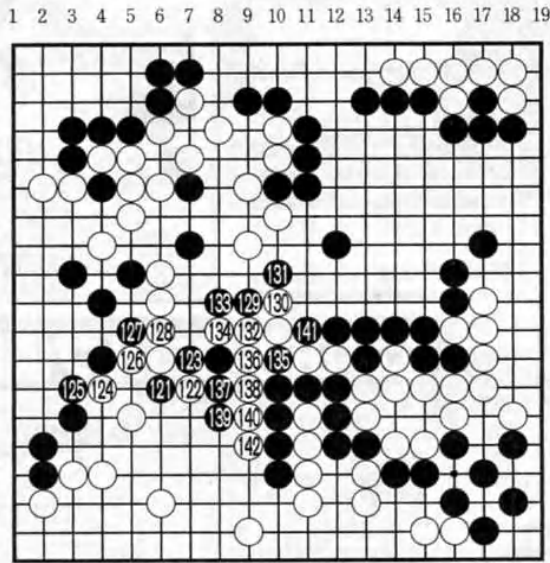
(観戦記 加悦正昭)

# 上毛特選碁

玉村町囲碁会定例会

白 五段格 萩原 義正(玉村)  
 黒 四段格 加藤 正二(玉村)  
 (定先コミなし)

▽第5譜(121~142)

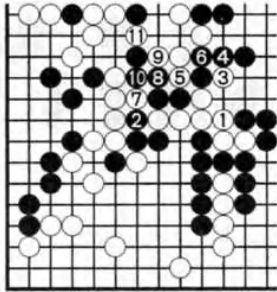


一二三四五六七八九  
 一 二 三 四 五 六 七 八 九  
 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

## 3手を読む

「自分が打つ。相手がどう来るか。それに対してどう打つか」。たったこれだけのことだが、やってみると、一筋縄ではいかない。「しめた」と思って打った直後、しまった」となることが、私たちに多い。

これは事業経営でも同じ。経営者



参考図

(観戦記 加悦正昭)

「自分が打つ。相手がどう来るか。それに対してどう打つか」。たったこれだけのことだが、やってみると、一筋縄ではいかない。「しめた」と思って打った直後、しまった」となることが、私たちに多い。

「自分が打つ。相手がどう来るか。それに対してどう打つか」。たったこれだけのことだが、やってみると、一筋縄ではいかない。「しめた」と思って打った直後、しまった」となることが、私たちに多い。

た。3手を読

もつと、両者

とも真剣に考

えて打ったつ

もりだが、相

手の応手が読

み通りでない

よつで、苦悶

の表情が続く。

双方、断点

を放置したま

まの大乱戦だ

から、それも

致し方ない。

黒135の2子

アテに対し、

白はこの2子

を捨て140へと

に囲碁好きが多いのは、

転じていった。ここで白

が2子をつくと、参考図

の白1から11までとなり、

黒をシチョウに取る手が

あつたようだが、読みき

れなかつたのだろう。

結局、黒は140と要の白

2子を取れたので、下辺

の10子は助かった。残る

5子は白140と出られて大

ピンチと思われたが、こ

こで明譜に思いがけない

サプライズが起こること

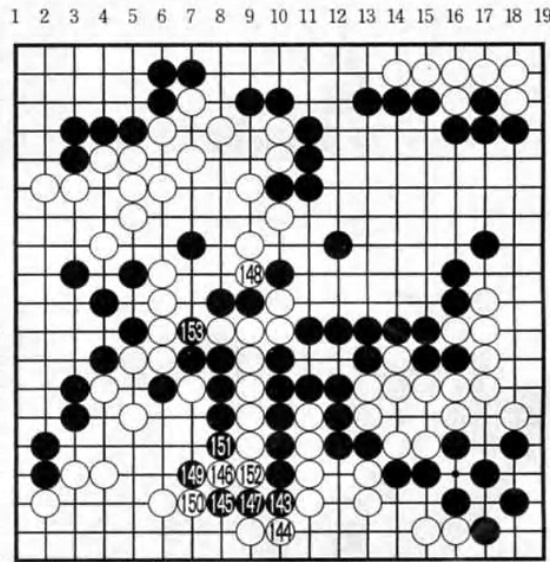
になる。

# 上毛特選碁

玉村町囲碁会定例会

白 五段格 萩原 義正(玉村)  
 黒 四段格 加藤 正二(玉村)  
 (定先コミなし)

▽第6譜(143~153)

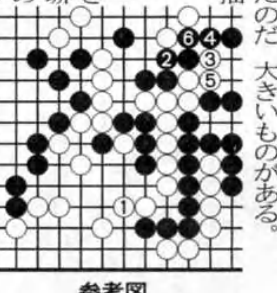


一二三四五六七八九  
 一 二 三 四 五 六 七 八 九  
 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

## 秀行先生

藤沢秀行名誉棋聖が亡くなった。秀行さんは、ルも愛した、八方破れの勝負よりも「芸」を重んじた。むろん勝ちたい気持ちは人一倍あつたのだ

毎度のこと。駅の



参考図

(観戦記 加悦正昭)

藤沢秀行名誉棋聖が亡くなった。秀行さんは、ルも愛した、八方破れの勝負よりも「芸」を重んじた。むろん勝ちたい気持ちは人一倍あつたのだ

藤沢秀行名誉棋聖が亡くなった。秀行さんは、ルも愛した、八方破れの勝負よりも「芸」を重んじた。むろん勝ちたい気持ちは人一倍あつたのだ

数々の名

手、名局を生

んだその天才

棋士は、ポカ

も多く、その

面でも有名な

棋士だった。

それにもかか

わらず棋聖位

を6連覇した

り、名人位を

史上最高齢で

獲得したりし

たのだから、

人並み外れた

能力の持ち主

であつたのだ

ホームから線路に落ちた

こともあつたらしい。

闘を重ねてきた両者だつ

たが、白148が悪く、下辺

の黒がピンチを脱した

上、149のハネから153まで

と、逆に白の10子が取ら

れることになつては、こ

こで勝負が終わつた。

白148で参考図のように

白1と打ち、以下5まで

と打てば白は無事だつた

参考図が、「それでは足らず

とみでの反発だつたらし

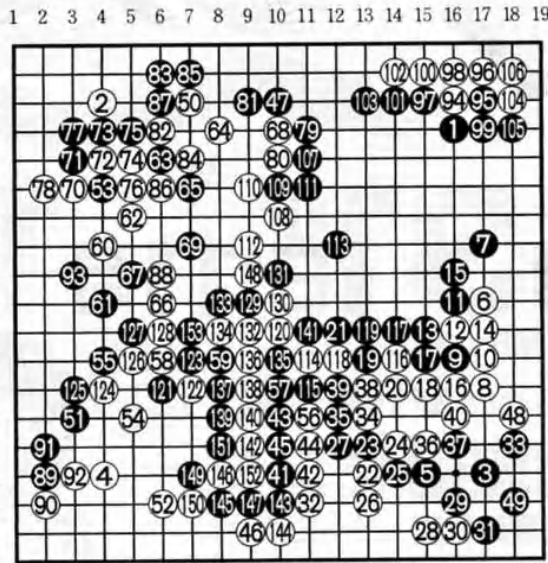
い。

# 上毛特選碁

玉村町囲碁会定例会

白 五段格 萩原 義正(玉村)  
 黒 四段格 加藤 正二(玉村)  
 (定先コミなし)

▽総譜 153



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

の連続から手に汗をかき、指の汗が石について、石が泣いているように見える時もあった。「石が泣いている」。これは非常に苦しい局面のときに往々みられるシーンだが、本局の終盤の激戦の最終に、それが

## 石が泣いている

【黒中押し勝ち】153手完  
 碁が世界中に広まってきた。国際囲碁連盟に加盟している国は、69カ国となった。  
 外国人にとって、碁はどんな魅力を秘めているのだろうか。多くの外国人は「未知のもの」「深い」「柔らかい」「重厚」などを感じる。今回対局された2人は、共に個性豊かな棋風で、対照的だった。緊張

きもせず打ってきたのか、と思う時がある。碁をゲームとしてみたか、と思ふ時がある。石と盤上、どこへ打つてもよいのだが、打つ人によって、その石の働きが全く異なるし、味わいも異なるが、その変化するところは、計り知れない奥深さがある。「深奥幽玄」と言われるゆえんである。  
 本局は、玉村町碁会のリーダー対決にふさわしい、中味の濃い熱戦であった。  
 (観戦記 加悦正昭)